零崎殺識の人間関係

佳織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
零崎殺識の人間関係

【Ｎコード】
Ｎ２６８７Ｘ

【作者名】
佳織

【あらすじ】
僕の名は零崎殺識。表での名前は秋冬皐ーしゅんとう　さつきー。僕の妹は零崎楽織。表での名前は春夏希良々ーしゅんか　きららー。僕達殺人鬼が迎えるのは、所詮終わりの無い終わりだった。
仮想人間シリーズ第１弾。

さつきらシリーズ（前書き）

あっはー、ＤＲＲＲと化物語をどう繋げるかが問題だ。

さつきらシリーズ

０章　人物紹介

主人公：零崎殺識（ぜろざきころしき）
本名：春夏秋冬殺鬼（ひとせさつき）
表世界での名：秋冬皐（しゅんとうさつき）
二つ名：昏迷僧主　―カレイドスコープディスペアー―
　　人形煉獄　―ナパームフェイク―
年齢：１９
身長：１７０ｃｍ　体重　５３ｋｇ

武器：斧　　絞殺幻想　―ミラージュスフィア―

人識と同じく生まれついての血統書付きの殺人気。
殺鬼と付けられたのはその所為で、案外この名も気に入っているらしい。
一日の平均殺人数、１０。（自分から襲った場合。）
襲われた場合には限界が無い。
得意な事は人殺しだけではなく、たまに喜楽の遊びや訓練に付き合う。
殺し方は主に首を落とす方法。
ちなみに喜楽は殺喜に全てにおいて勝てた事が無い。
戯言遣いとは友人通り越して大親友。
ただあの軋識が従っていたという友が恐ろしく怖いらしい。

ヒロイン

主人公：零崎楽織（ぜろざきらくおり）
本名：春夏秋冬喜楽（ひとせきら）
表世界での名：春夏希良々（しゅんかきらら）
二つ名：堕落幻影ーカレイドスコープアイズー
　　二重解体ーダブルブレイカーー
年齢：１５
身長　１５３ｃｍ　体重　３７ｋｇ

武器：チェーンソー　微小童話ープラズマビリーバーー
　（銃　傀儡公主　ースパイラルイミテーションー）
金髪三つ編みポニーテールが特徴。
というかポニーテールを三つ編みで括ってある。
美少女で気が強く人を守れる優しい子。
それ故に人殺しは好まないが、零崎は人の段階を超して愛している
為、
零崎を傷付ける者は容赦なくチェーンソーを振るう。
一番体力が無く、腹筋回数３０秒最大１６回、握力１５。
筋力も余り無い為、チェーンソーは軽い物を選んでいる。
時折銃に変わる。
軋識にビリーとかカレーとかブルブとか呼ばれる事だけが悩み。
ルイかラルと呼んでもらっているが、喧嘩した場合ビリーになる。
零崎を侮辱されたり過去の話を持ち出されると凄い事になる。
鬨織よりはではないが一人でアパートを粉々に出来るほどになる。

さつきらシリーズ（後書き）

（、・ω・、）ショボーン

1章　終わりから始まり始まりで終わる。（前書き）

つまりは最初で最後っつー事だ。ジンセーは。

1章　終わりから始まり始まりで終わる。

春夏秋冬殺鬼は普通に人生を送っている。

だがその名前が故に学生時代は意味も無く侮蔑され、

妹の喜楽も意味も無く侮蔑されていた。

いや、喜楽に関しては男子からは侮蔑、女子からは嫉妬を受けていた。

それは劣る物無いほどの美形だったからだ。

（殺鬼も美形だが名前の所為で乙女心より恐怖心が芽生えたらしい。）

現在殺鬼は大学生を中退した。

1週間の大学ライフだった。

「もーっ！！にーちゃん何で中退しちゃうのっ！？

せっかくのいーサンがいる学校でそー！？

鬨織ちゃんも中退したしさぁー。」

喜楽は机に突っ伏した状態で顔をだし、手足をばたばたして嘆いた。

「その、「兄さん」みたいにいーを呼ぶのはやめろ。喜楽」

「ほぇ？零崎以外の人に兄ちゃん的なコト呼んじゃ駄目なのっ？

ッはァっ！！！！

嫉妬すか！！嫉妬ですね！？お兄様！！！！

分かりますたー！！了解でっさー！」

「落ち着け。そういう意味じゃない。発音の問題ってのが（ｒｙ」

「そーいうことーん！！了承リョウショー！

はつおーん！！出発おーん！！

なははー！」

さらに激しく手足をばたつかせる。

「エンジン停止。」

殺鬼は常備しているハリセン（喜楽用）で喜楽を叩いた。

もちろん手加減はしている。

ヒュンッ！！だなんて音はせず、

ぱすん。と喜楽の頭にハリセンが乗った。

「ほぇ　（ぱすん）・・・あ、えっと、
あっ、痛ッ！！」
喜楽はそれほど痛くないハリセンを頭で受けた。
「反応遅いよ。
それからテンション下げて。」
「了解！！
【きらのテンションがもとにもどった！】
よし。で、兄ちゃんまた大学入る気ぃ無いの？」
喜楽は首を傾げる。
「多分戻るよ。まだ理数系はしたいし。」
殺鬼は喜楽の机にあった椅子に座り、頬杖をつく。
「ふぅん、なら良かった。
いーさんは兄ちゃんが居た時すごい楽しそうだよ。」
ほわわんとした雰囲気で喜楽は笑う。
「・・・だといいけどね。」

その時。

ぴんぽーん

「えーと、喜楽ちゃん？」

戯言遣いが戸を開ける。

喜楽は飛ぶように席を立つ。

バターン！と椅子がぶっ飛んだ。

「ｋｔｋｒ！！！！！

ほら来たっ！！噂ァすればかもよっ」

「あ、やっぱり喜楽ちゃんだったんだ」

「ほぇ、何が」

「さっきからくしゃみが止まらなくてね、

喜楽ちゃんの仕業か」

「あっはー！！！！！

ふっ、あっは、聞いた！？
くしゃみの発信源で此処まで来たんだよ！？
テレビで放送すべきだ！！
きっとこれは電話の次に有効な（ｒｙ
ともかく上がって上がって！！
もー私のてんそんはとっくの間に上がってるよっ！
→Ａ☆Ｇ☆Ｅ☆Ａ☆Ｇ☆Ｅ→だよ！！」
「悪い。こんな妹で」
「あ、いや。
気にしないでくれ、いつもの事だろ」
「そうだな」
「セツナイｏｒｚ」
ー閑話休題ー
「・・・っていう話を先程してたんだ。」

「うん、絶対相性良いよね、二人！」

「「嘘だ」」

「ホントだよー！嘘じゃないよー！

だって兄ちゃんといーさんすごい口調似てるし、

趣味だって合うし、

それから、えーと・・・。」

喜楽は言葉につまり人差し指を口の下に当て瞳を上へずらした。

考えるポーズだ。

「えーと・・・」

今度は「考える人」のポーズをとりだす喜楽。

「もういいよ、喜楽ちゃん。」

喜楽の頭にいーちゃんは手を置く。

撫でているのではない。此処重要。

「・・・むぅ。

ホントに似てるんだけどなぁ・・・。」

「ていうか、喜楽ちゃんが高校に通ってるっていう噂聞いて此処きたんだけど。」

「あり、くしゃみじゃないの？」

「？さぁ、忘れた。」

「うわ、忘れっぽいね。

まぁどーでもいーや。

うん、通ってるよ。

来良学園。中々いい高校だよ」

「いや、でも喜楽ちゃん殺人鬼でしょ、

ろくに変装もしないし警察来たら一発で終わるよ」

「そんときは学校ごと破壊するからだいじょぶいV」

「そういう問題？」

「あ、そうか、周りにパトカー集まってるかぁ、

だったら地域ごと壊しちゃう」

「それは無理ってもんだよ！！」

「なははー、やってみなきゃわかんないぜ？

つーより私ガッコに3年くらいいたら警察の人も気付くだろうけど、

今私は高3設定だから大丈ぶい！」

2章　1ヶ月前（前書き）

らいらがくえん。

2章　1ヶ月前

それは1ヶ月前に遡る。

「・・・喜楽？」

「・・・えへへ」

「今なにをしているのかな？」

「べ、べんきょー」

「喜楽、お前ちょっと勉教しすぎじゃないか？」

「・・・何ゆえ？」

「これ、考え方が高3だぞ」

「・・・んー」

「ともかく・・・、お前今中3なんだから、
中3の勉強をしろ。」

「？
中3が高3の勉教しちゃ駄目なの？」

「駄目ってワケじゃねーよ。ただ・・・。」

「ただ？」

「・・・

まぁいいか、喜楽。

お前は高校に入れ。」

「・・・はい？話が分からぬ。」

おや？きらのようすが・・・。

「来良学園　だよ。知ってるか？」

「・・・殺鬼兄ちゃん、

こないだ私を澄百合学園に入学させようとしたでしょ、

今でも覚えてるよ。忘れたなんて言わせないよ。

それに殺人鬼から殺人を教わってる春夏秋冬喜楽だ。

・・・・・・・

どうせ普通じゃない学校なんでしょ。」

「・・・普通だよ。

勉教目的で行くんだ。」

「・・・ふー・・・ん？」

まだ怪しげな顔になって、

そして5秒後、何も無かったかのようにけろっと喜楽は言った。

「まぁ怪しい学校だったら私その学校ごと壊滅させるからだいじょぶ」

「お前人殺しは好まないキャラじゃねーかよ」

「・・・おや、人識お兄ちゃんではござらんか」

「かははっ、何だよござらんかって」

「ふほうしんにゅーいくない・・・

って、人識兄ちゃんは家賊だったや。」

「おう、楽織、殺識。」

「・・・人識さん、今日は」

「同じ同じ歳だろ、さん付けすんな」

「あ、すいません。

人識、今日は」

「ほんとに言いやがった」

「？」

「さっきまで私達高校の話してたんだよー、

私が高校に行くとか云々。」

「へー、」

「嫌だけどね」

「え」

「・・・兄さん？
零崎殺識兄さん？

何でそんな動揺してんのかなぁ？？

んー？言ってみてー？

何かなー？」

「あ・・・、いや、

制服、もう注文して届いてるんだよね。

入学届けも出したし」

「・・・。」

行くことになりました。

2章　1ヶ月前（後書き）

3章　高校転校（前書き）

注意です。よく読んでください。

阿良々木ハーレムの皆様は新潟に住んでるはずですが、

池袋に住んでる設定です。

覚えとけよ！（ジャイアン）

3章　高校転校

「始めまして！
春夏希良々です！よろしくお願いしまーっす！
えぇと、京都から越して来たので全然池袋の知識ないでーっす！
ハブにしたらおこっぞー！なははーっ！」
「ヒューヒュー！！！！」
「なははっ、この学校たのしそーだなー！！」
「えー、では、次、秋冬。」
「・・・秋冬皐です、よろしくお願いします。」

あ、ども、喜楽です。
私の名前の由来をお教えしましょう。
「お前行き成り自己紹介してる時に裏舞台に出てきたと思ったら何自分の名前の由来解説しようとしてんだよこのキチガイ外道」
とか思ってる人が居たらすいません。
えー、皆さん、「ひととせ」って漢字で打ってみてください。

「一年」って出ませんか？

はい、私の名前は喜怒哀楽からとってます。

良い意味のをとってます。

あれっすね、私は極めて良い名前なんすよ。

一年間ずっと笑ったり楽しんだりするっていうそんな意味です。

さて、兄ちゃん。

兄ちゃんは別です。悪い意味なんです。

一年殺鬼。

一年間ずっと殺人鬼ってわけです。

まぁこんな感じで私達の名前が出来てるわけです。

厨2とか言ったら画面から私が飛び出てきますよ。多分。

うん、ええ。

ーーーーーー

閑話休題

「兄よ」

苺マーガリンパンを持ちながら兄の耳元で囁く喜楽。

「何だ・・・楽織」

一方焼きそばパンを持ちながら常音で話す殺鬼。

「何でパンって人気なんだろうね」

こそっ　と喋る喜楽に殺鬼は

「知らねぇよ」

と返した。

「苺ってさあ、甘くないよね」

「甘酸っぱいとでも言いたいのか」

「辛い」

「お前の味覚が不安だよ」

「渋い」

「じゃあ食うなよ！」

「マーガリン美味しいもん！」

「マーガリンパンの選択は無かったのかよ！」

「味気ないし！」

「じゃあお前何でそれ選んだんだよ！」

「・・・いや、何だかんだ甘ったるいキャラを作ろうかと」

口にパンを押し込む喜楽。

「キャラの為なら苦労は惜しまないのかお前は」

とんでもない奴だった。

というか毎日食うのかよ。

「てかさあ、全然池袋の情報知らないんだけど。

なんかそれっぽい人居ないの？

こう・・・なんか

Ｍｒ池袋って人」

「僕に言うな」

「京都の事なら何でも知ってるんだけどなあ」

「あー」と大口を開けまたパンを頬張る喜楽。
整った顔立ちは決して変わらないが（むしろ可愛い）
女らしさの微塵もなくその苺マーガリンパンを食べる意味が皆無だった。
僕も焼きそばパンを一口食べる。
美味しかった。
「・・・いー、元気かな」
「？」
人差し指で口に付いた苺ジャムを取っている喜楽。
「元気だって。いーさんの事だ。
死にかけても元気だって」
にぃ　と笑う喜楽。
「・・・付いてる」
僕はウェットティッシュで口を拭ってやる。
「っっっていうかさあ、何で高校なんか通うことになったの？」

「ああ、喜楽にはまだ話してなかったか。」

3章　高校転校（後書き）

零崎シリーズ書くの面白いですw

4章　回想（前書き）

潤さんとの会話。

4章　回想

しょ「はいこれでジャッジメント。」

「うわ」

オセロを裏返す殺鬼。

白色で埋まっていた。

「何事にも白は勝つんだよ。

いー、白でやってみなよ」

「そういう問題なのかよ・・・。

随分とチートだな。

て、喜楽ちゃんは？」

「ああ、県外まで行って零崎しに行ってる。

京都で零崎控えろって人識兄が言われたそうだから。」

「そこまでしてかよ」

・・・ん？

赤色の気配。

二人同時に振り向いた。

「さーーっつきちゃーーん！」

赤い声。

でも「あの」声だった。

「・・・。

はーーあーーいーー！」

「笑うなぼく頑張れぼく」

いーが横を向きながら譫言の様に呟く。

いや。戯言か。

アパートから駆け下りる。

「どうしたんです潤さん」

「いやさあ、殺鬼ちゃんの妹ちゃん。喜楽ちゃんの事なんだけど」

「はい？」

「さっき祓魔師に捕まってた」

「はいぃぃぃ！？」

「すげえ反応。

まあそれは何とかなったんだけどよ。あたしが助けたから」

「！！

な、え、喜楽が迷惑かけて・・・！」

「いやいやいやいや、
対して凄いことしてねえぜ？
警察みてえな奴から腕引いて暴れまくっただけだから。
人識君と薗識君も居たぜ。」

「っっ、いえ！！何かお礼をしないと・・・・」

「あー・・・じゃあひとつ頼んでいいか？」

「はい、僕に出来ることなら何でも！」

「なんか奴隷みてえだな。
えっとな・・・、来良学園って高校に喜楽ちゃんを入学させてほしい。
できれば殺鬼君も。」

「いや、でも僕もう大学生ですし」

「情報屋の折原臨也って奴にこれ渡してほしいんだ。」

・・・SDカード？

「ちなみに見るなよ？
見たら爆発するぜ」
「そういう系の仕組みですか・・・。」
「玖渚ちゃんなら知ってると思うぜ。
「うにー、いざちゃんはあんまり僕様ちゃん好きじゃないよ」
って言ってたし。」
「う・・・玖渚さんですか」
「論・・・ってか鬨織が居なくなってから結構暇してっからなぁ。
会いにいってやれよ、暇だったら。」
「ああ・・・今はまだ一次試験くらいでしょうかね。」
「いいハンターになれればいいけどよ・・・。
ま、話戻すけど、
制服は偶然偶然女子用男子用二つあるんだ。
あと偽造学生証と偽造身分証明証。」

「ああ、何から何までありがとうございます。」

「いや、頼んだのあたしだからな。」

「ていうか僕は大学生で高校生に見えないですし喜楽は中学生で高校生に見えないですよ・・・？

中学生は中学生でも身長が小さいですから・・・。」

「まあ大丈夫だって。

ちなみに池袋だから。」

「池袋・・・？京都にそんな所は」

「東京だっての」

「！？」

4章　回想（後書き）

5章（前書き）

「あの」3人と絡みます。

5章

「牛乳うまー」

喜楽が屋上のフェンスを越した縁に座り足を投げ出す。

要するに危ない場所に座っている。

それも牛乳とポケコン（友と論で解りやすく改造した）を持っている為かなり危険だ。

「コーヒー牛乳うまー」

殺鬼も同じ行動に出た。右手にＩ　ｐｈｏｎｅで左手にコーヒー牛乳。

「てかさあ何でコーヒー牛乳？かっこつけ？」

「お前は何で牛乳なんだよ。」

「教室でもうキャラは見せたからね。子供らしい一面を見せてもいいかと。」

「お前にとって苺マーガリンパンは大人らしい食べ物かよ」

「ＪＫらしい食べ物っすよ、もう放課後だけどね。」

えへへ　と笑う喜楽。

「で、どうよ、情報屋さんの情報分かった？」

覗き込むと

「さっき」というチャット名があった。

「・・・兄よ、そりゃ幾らなんでもネーミングセンスなさすぎだろ。

さっき　って言い辛いし無理やりだよ」

「お前何にしたんだよ。」

「きどあいらく。

「き」は「喜ぶ」で「ど」は「努力」。

「あい」は「愛する」で「らく」はそのまま「楽」。

喜努愛楽。」

「とても殺人鬼とは思えないな・・・。」

「えへ」

「殺人鬼？」

「「！？」」

「？

どうしたの紀田君虫でも見つけたの？」

「お前これは二人に失礼だぞ。

二人とも顔真っ青だし傷ついたんじゃねえの？

まあそういう時の為に俺は最高の（ｒｙ」

こっから←は小声タイム。

「兄ちゃん、バレたよ」

「いや落ち着け。上手いこと失神させて記憶を消すんだ」

「兄ちゃん器用だもんね」

「お前がさせんだよ」

「だが断る」

「無理に決まってるだろ僕にそんな事」

「じゃあそんな事思いつくな」

「喜楽のくせに普通の事言いやがって」

「何それ私が異常者みたいじゃんか。

殺せばいいんじゃない？」

「やめろ、学校は荒らすな」

・・・・・・

「・・・っていう考えなんだけどどう！！？？春夏秋冬従兄妹！」

「「はうっ！？」」

「うわあ可愛い」

「ごめん聞いてなかった」

「日本の古都の京都から来た大和撫子日本男児に！！

このナウなヤングが集まる夜の街池袋を！

紹介しようじゃないか！」

「「へぇ」」

「何その薄い反応」

「ウ、ウワー！！ウレシイナー！

ナア！！キララ！」

「だねだねさつきこれいじょうにうれしいことはないよやばいちょうううれしいよしんぞうがばっくばくだよときめきだよきらめきだよすばらしいよ」

「うん満足！」

「・・・これで満足なんだ」

「惨めだね」

後ろの黒髪の男の人が言う。

結構ひどい。

「あ、そういえば自己紹介遅れてたね」
黒い髪の可愛い女の子が言う。
「園原杏里です。宜しくね、皐君、希良々ちゃん。」
「あ・・・、竜ヶ峰帝人です、よろしく。」
「えー何々帝人ぉ随分恥ずかしげじゃん？
何々お前ってばまた（ｒｙ」
「違うって！」
「俺は紀田正臣。宜しくな！」
「よろしく」
殺鬼が軽く頭を下げる
「よろしくー」
喜楽はできる限りの笑顔を作った。
「で、池袋の案内の件なんだけど、どう？」
「でもいいよねそれ」
「ああ、確かにその人探すのに丁度いい。」

「人探し？」

「ああ、実は私達人を探しに来たんです。」

「うわぁいいねえいいねえ運命の人を探しに従兄妹二人で京都から遥々池袋まで・・・・。」

「折原臨也さんって人だよ」

「「「・・・・・・」」」

「？

どうかしたのか？」

「いや、その折原臨也って・・・・」

「？」

「いや、まあすぐ会えるよ。

なっ！」

「僕に話を振らないでよ・・・・。」

「じゃあしゅっぱーつ！」

正臣が右拳を突き出す。

「おー！」

喜楽も真似する。

5章（後書き）

なんか無理やりです。

6章（前書き）

案内します！

あ、もう一度言いますが

新潟にあるはずの直江津高校が池袋にあります。

新潟にあるはずの直江津高校が池袋にあります。

大事なことなので（ｒｙ

6章

「で、ここが駅。

希良々ちゃんなんかが似合いそうな服とか靴とか売ってるぜ」

「へえー」

「あとはその向かいにある名高い直江津高校。

制服が滅茶苦茶可愛い。特に中学。」

「直江津高校・・・。」

何で潤さんは来良学園にしたんだろう。

まあどっちでも同じか。

「で、ここが俺等がよく来る場所なんだけど超絶景じゃね？」

「うわー！都会だよ！兄・・・皐！」

「そうだなきら・・・ら！」

「写真撮ろ写真！！」

「ああ、そうだな。」

「大興奮だね」

「うーん、後はあの人達に会うだけなんだけどなぁ・・・。なあ皐、その辺でポストかゴミ箱か標識か何かでかい物飛んでないか？」

「ちょっと待てそれかなりシュールだぞ」

「あ、ポスト飛んだ」

「何っ！？」

「発見！

折原臨也に会いたいんだろ？」

「うん」

「会えるぜ！そのポストの所に行けば！」

「「・・・？

（折原臨也って・・・？）」」

・・・　空想　・・・

情報屋でポストや標識やゴミ箱を吹っ飛ばすムキムキな玖渚機関や人類最強に嫌われる男の人。

・・・　・・・

「「怖い人なんだね」」

「恐い奴だよ」

6章（後書き）

次から物語を掴んでいきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2687x/

零崎殺識の人間関係

2012年1月6日10時45分発行